

高齢猫の管理

Sarah M. A. Caney¹

要約

猫の寿命はここ数十年で劇的に延長しており、ドメスティック・ショート・ヘア猫；DSH猫（短毛の家猫）の平均寿命は12～14年が一般的であったが、現在の平均寿命は18～20年が適当と思われる。食事や医療が飛躍的に改善したことに加え、本誌でも紹介しているように高齢ネコに認められる疾患を中心とした研究が近年多く実施されるようになってきたのも事実である。効果的な予防医療によって、迅速な診断と適切な治療介入を実施できることから、生活の質の向上（寿命延長にも寄与する可能性あり）や人とペットの絆を深めるうえで有用である。

**European Journal of Companion Animal Practice*
(2015) Autumn 25 (3)

4～19ページ

本稿はインターネット<http://www.ejcap.org>でも閲覧いただけます。

はじめに

「高齢猫の管理」と題しているが、まずはじめに何歳から高齢として捉えるか検討する必要がある。慈善団体International Cat Care (www.icatcare.org)が作成した猫のライフステージのガイドラインでは、猫の年齢を人の年齢に換算した換算表(表1)を公表しており、本稿においてもこのライフステージをもとにしている。高齢猫を対象とする場合、壮年期、高齢期、老年期が含まれる。高齢期と老年期の猫で最も頻繁に疾患が認められ、壮年期においても初期症状が認められる場合もある。ご家族自身も、年を重ねるにつれて様々な医学的検査を受ける頻度が増えることから、猫の年齢と人の年齢換算表を用いることで、猫における予防医療の重要性を説明するのに有用である。

高齢猫に多く見られる健康上の問題とは？

高齢猫に多く見られる疾患を表2に示した。猫は加齢に伴い表に示すような疾患の内、1つもしくは複数罹患することが多い。そのため、猫の健康問題の状況を把握し、最適な治療プランを立てるためには詳細な情報が必要である。

無症候性疾患の重要性

猫は、病気の徴候を隠すことに長けており、高齢猫の殆どは状態が悪化するまで診察を受けることがない。そのため、来院時には残念ながら病気が進行してから発見されることになる。丁寧な問診と身体検査の実施によって、健康な高齢猫の多くで無症候性疾患が見つかることがあるため、適切な処置を実施するためにはそれが重要である。著者が携わった過去の調査によると、健康な10～18歳の1/3で、尿比重が一般的に使われているカットオフ値の1.035を下回っていることが報告され(Mitchell, 2011)、さらに約1/3の猫で、甲状腺機能亢進症、全身性高血圧症や慢性腎臓病などの重大な疾患が見つかった。

表1. 猫のライフステージと人の年齢換算表
(International Cat Care, www.icatcare.orgより掲載)

ライフステージ	猫の年齢	人の換算年齢
幼年期： 誕生～6カ月	0～1カ月	0～1年
	2～3カ月	2～4年
	4カ月	6～8年
	6カ月	10年
少年期： 7カ月～2歳齢	7カ月	12年
	12カ月	15年
	18カ月	21年
	2年	24年
成猫期： 3～6歳齢	3	28
	4	32
	5	36
	6	40
壮年期： 7～10歳齢	7	44
	8	48
	9	52
	10	56
高齢期： 11～14歳齢	11	60
	12	64
	13	68
	14	72
老齢期： 15歳齢以上	15	76
	16	80
	17	84
	18	88
	19	92
	20	96
	21	100
	22	104
	23	108
	24	112
	25	116

近年実施された大規模調査によると、10歳以上の猫の21%で尿比重が1.035を下回っていたが、無症候性疾患を持つと診断された割合はこの数値よりも低いことが明らかにされた(Paepé et al, 2013)。無症候性疾患を早期に発見するためにも、高齢猫が来院した際にはその機会を最大限に活用することが極めて重要である。本稿で後述するが、一見健康な高齢猫全てに対して、定期的に健康診断を実施するべきである。一般的な健康上の問題の多くは治療可能であり、早期診断と治療介入によって治療結果も良いものになる。

表2. 高齢猫の健康上の問題と罹患率(関連文献)

疾患	コメント
細菌性尿路感染	甲状腺機能亢進症および糖尿病の猫の約12%、慢性腎臓病の猫の22%～30%に併発 (Mayer-Roenne et al, 2007);
認知機能障害	加齢による脳機能の低下により、排泄時の粗相、異常に鳴く、昏迷、健忘や睡眠様式の変化などの行動変化が認められる。15歳以上の猫の50%以上に見られると推定 (Moffat and Landsberg 2003, reviewed in Gunn-Moore and others 2007)
便秘	
難聴	
歯科疾患	
糖尿病	推定罹患率は最大0.4% (McCann et al, 2007)
甲状腺機能亢進	10歳以上の猫の罹患率は約9% (Stephens et al, 2014)
慢性腎疾患 (CKD)	15歳以上の猫の罹患率は約30% (Lulich et al, 1992)
新生物 (腫瘍)	
骨関節炎	12歳以上の猫の罹患率は90%以上であると報告 (Hardie et al, 2002)
全身性高血圧症	慢性腎臓病の猫の罹患率は20%以上と推定 (Syme et al, 2002)

推奨される検査項目と頻度

AAFP (American Association of Feline Practitioners) と International Cat Care (iCatCare) の両機関は、高齢猫の介護に関するガイドラインを提唱している。著者は、iCatCare が最初に作成した「Wellcat」ガイドラインを参照しており、以下の通りである。

- すべての年齢の猫に対して年に1回健康診断を実施し、一般的な身体検査、体重とボディ・コンディション・スコアを記録し、適切な予防医療についてご家族と話し合う場を設けること。
- 上記に加え
 - 「壮年期」猫(7歳以上): 血圧測定(図1)と、尿検査を年1回実施。尿の採取法と尿比重の解釈については、後述する。
 - 「高齢期」猫(11歳以上): 壮年ネコの検査項目に加え、血液検査(血液検査、血液化学検査、総サイロキシン濃度)を年1回実施。さらに、血圧測定と尿検査の頻度を半年に1回に増やすことも検討した方が良いだろう。
 - 「老年期」猫(15歳以上): 半年に1回、身体検査、体重測定、ボディ・コンディション・スコア、血圧測定、尿検査を実施。血液検査は、頻繁にモニタリングを行う必要がある場合を除き、年に1回は最低実施すべきである。

著者は、高齢期の猫は半年に1回、老齢期の猫は3か月に1回の頻度でこれらの検査を実施している。



図1. 高齢猫の健診項目の中で血圧測定は非常に重要な項目の1つである。著者は写真で示すように、ドップラー法による血圧測定を推奨している。

ヒストリーをとる—猫において重要なコツ

完全なヒストリーをとることにより、病気の手がかりが得られるので、問診でヒストリーをとることは評価の重要な部分である。ご家族へ自由回答形式と選択形式で問いかけることで、問題点を具体化し、見落としをなくすることが大切である。著者が利用している「高齢猫の健康管理シート」を本誌で紹介しているが、問診および身体検査を実施する際に活用頂ければ幸いである。特に忙しい病院では、こうした書式を利用することで時間を有効活用でき、また見落としを防ぐのに役立つだろう。本書式は予約時間前の待ち時間を利用して、ご家族が待合室で記入することも可能である。この書式は問診時に病歴や身体検査所見から、さらなる検査の必要性の有無を素早く見極めることを目的としている。

特に注意が必要な項目

- 体重とボディ・コンディション: ご家族が気づいた変化の有無
- 食欲: 食欲増減の有無。現在の食事の種類や摂取量
- 口渇: 口渇感の増減の有無
- 猫用トイレや排泄行動: 例) 骨関節炎(OA)などの痛みでキャットフラップが使えない猫において、不適切な排泄行動が認められる場合がある
- 精神状態: 認知機能障害や行動変化の有無。家庭内で猫と人や、他の動物との関係性の変化の有無
- 活動性: ぎこちない動きやジャンプする回数が減っていないか。「高齢猫の健康管理シート」に記載されているような活動性に関する設問から、OAで見られるようなわずかな徴候を見つけるのに役立つ
- 活力: 甲状腺機能亢進症に一致する活動性亢進や落ち着きのない行動の有無
- 消化器徴候: 嘔吐や下痢の有無
- 排尿・排便の問題: 例) 排泄姿勢を取ったときに痛みを伴うため、猫用トイレに排泄できないことがあるか
- 視力: 全身性高血圧症を示唆するような視力の問題が確認できるか

高齢猫の身体検査

高齢猫は、頑固で且つ慣れ親しんだ環境や日々の習慣が変わることで非常に強いストレスを受ける。ストレスは、多くの臨床検査に支障を来す恐れがあり、交感神経系の興奮により心拍数、呼吸数、血圧が上昇することがある。高度の緊張やストレス下の猫では、特に腹部触診は困難となる。

ストレスによって臨床検査に与える影響として、高血糖（腎閾値を超えるような異常値を示す例もある）、リンパ球減少症やその他のストレス性白血球像が多く認められる。落ち着いて満足気な猫の場合検査が実施しやすいばかりか、より正確な臨床検査結果が得られるため、迅速且つ正確な診断が可能となる。

患者へのストレスを最小限に抑えるためにも、「猫にやさしい」アプローチが非常に大切である。iCatCareウェブサイトでは、本テーマについてさらに詳しい情報やリソースが掲載されている。

一般的な推奨事項

- 可能であれば、使っているキャリーケースの種類についてアドバイスを：上部が開くキャリーケースが望ましい。ストレスを受けやすい猫の場合は、キャリーをタオルで覆うことも役立つ。蓋が着脱できるキャリーケースであれば、診察台の上より、蓋を外したキャリーケースの中で診察を受ける方が安心する猫もいる(図2)。
- 診察室やキャリーケース(猫を入れる前)に、合成F3フェロモン製剤(例えばFeliway、Virbac)などを用いると安心感を増すのに役立つ。診察中は、合成F3フェロモンディフューザーを稼働させる



図2. キャリーケースの蓋を外して、中に入ったまま診察するとより安心する猫もいる。

- 犬用鎮静フェロモン(DAP、Virbac)を用いることで、来院または入院する犬を落ち着かせることができ、結果的に猫にとっても平穏な環境を整えられる
- 診察前に、できるだけ落ち着いた静かな環境で「緊張をほぐす」時間を設ける。キャリーケースを開け自ら外に出てくるよう促す(図3)



図3. できるだけ自らキャリーケースから出てくるよう促す

- ヒストリーをとっている間は、穏やかな口調で話しかけながら、突然動いたりせず、ゆっくり静かに動くことを心がけ、猫は自由に数分間歩き回るままにさせる
- 高齢猫の診察や採材を行うときには、特に穏やかに優しく接する。高齢猫の多くは重度の骨関節炎を患っていることがあり、慢性的な痛みを伴う場合がある。そのため、猫はより神経質になりキャリーケースから出した後で、診察や押さえつけられたりするのを余計嫌がる
- 診察室で患者を診るときは、柔らかいパッド入りベッドなどがあると役立つ
- 高齢猫の多くは聴力や視力が低下していることから不安が助長されている可能性を考慮する
- ネコは匂いに敏感なため、匂いの強い香水や消毒薬洗浄用品は、不快感を与える。できるだけ部屋を換気し、消毒薬は完全に洗い流す

- 物理的におさえつけることで生じるストレスを防ぎ、緩和するために、薬剤を用いることも考慮する

身体検査では、よくある問題をできるだけ多く見つけることが大切である。高齢猫の場合は、特に以下の項目に注意する。

- 姿勢と歩様観察：痛みやこわばりの有無、ジャンプや階段の上り下りする様子を観察する(図4)
- 収縮期血圧の測定：理想的には、ドップラー法を用いて落ち着いた状態で測定する(身体検査の最初に実施することが望ましい)
- 口腔内検査-歯科疾患、歯肉蒼白等の有無
- 甲状腺の触診：甲状腺腫の有無(図5)
- 心音聴診：甲状腺亢進症を示唆するような頻脈の有無
- 腹部触診：しこりや便秘の有無
- 眼科検査：高血圧による障害の有無。眼底検査については後述する
- 体重とボディ・コンディション・スコア：前回の測定時からの変化の有無。体重がどの程度変化したかを評価するために、変化率(%)を算出することが効果的である(表3)



図4. 歩様と活動性の評価に役立つ。この診察室では、壁に階段を作り、そこを上り下りする様子が観察できる。



図5. 健康な猫では甲状腺の腫大は認められない。甲状腺腫の存在は、甲状腺機能亢進症を示唆する。甲状腺腫の有無を触診するには、猫の背後(写真のように)か前に立ち、親指と人さし指で咽頭を触知してから、指を首から胸郭入口までなで下ろし、次になで上げる。甲状腺腫は小さな豆粒大の腫れのように感じることが多く、指の下に滑り込む。頸部の触診では、顔の向きを左右に動かすことで触知が可能となる場合がある。

高齢猫の身体検査

眼底検査は臨床検査のなかでも重要な検査項目の1つで、全身性高血圧症の診断に特に有用である。暗室で実施する必要があるが、部屋が十分暗くできない場合は0.5%トロピカミドを1滴滴下し、瞳孔を散大させる必要がある。

倒像鏡検査は、迅速且つ正確な検査ができる優れた検査である。この検査は、光源と20~30Dの集光レンズが必要になる。保定は最低限にし、猫の頭はニュートラル・ポジションか若干上に傾ける。光源は獣医師の眼の高さで保持し、もう一方の手でレンズを猫の目のすぐ前で光線と垂直になるように持つ。レンズを持つ方の腕はまっすぐ伸ばす。眼底の反転像(inverted view)が見えるまで、眼の内部を見る角度を変えていく。この検査を初めて実施する際には、タペタム反射が見られるまで眼の前にレンズをあてない方がよいだろう(図6)。

表3. 猫の体重変化率(%)の計算

Gandalfは去勢手術を受けた15歳の雄の短毛の家猫。健康時は体重が5.17kgあったが、現在は4.77kg。ここ数カ月間、口渇感増大、食欲低下、傾眠、嘔吐がある。

体重変化率の計算

Step1: 前回の体重から受診日の体重を引き、減少分を算出する: $5.17 - 4.67 = 0.5\text{kg}$

Step 2: ステップ1で求めた数字を前回の体重で割る:
 $0.5 \div 5.2 = 0.0967$

Step 3: ステップ2で求めた数字に100(%)を掛ける:
 $0.0967 \times 100\% = 9.7\%$

評価:

Gandalfの体重は9.7%減っている。これは63-kg相当の人が6kg以上 (6.1kg)減少したことに匹敵する。

体重変化率の解釈—著者の推奨

体重減少率: >10%	深刻な体重減少。早急に対応が必要。詳しい検査(体重減少の要因を特定するため血液・尿検査を実施)が推奨される。
5~10%	強度の体重減少。詳しい検査(体重減少の要因を特定するため血液・尿検査を実施)を実施する
2.5~5%	軽度の体重減少。詳しい検査(体重減少の要因を特定するため血液・尿検査を実施)を検討し、2~4週間後に再度評価を実施する。 基礎疾患がある場合は、体重変化が2.5%と軽度であっても、重大な原因も想定されるため無視してはならない。
<2.5%	有意性は不明。日常的な体重変動あるいは強度な減少を示唆する。必要に応じて2~4週間後に再評価する。

結果

詳しい検査で、IRIS分類でステージ3の慢性腎臓病と診断された。Gandalfのケースでは、制酸薬と食欲増進剤を加えた腎臓病食が治療成果をあげ、臨床症状が改善し、2カ月の治療で体重は0.3kg増えた。



図6. タペタム反射とは、眼の中に光を照射したときに見えるいわゆる「キャッツアイ反射」である。本症例では、両眼の網膜変性によりタペタム反射が誇張されている。写真はNatasha Mitchell MRCVSの厚意により掲載。



図7. 倒像鏡検査は、眼底検査に役立つ。検査は暗室で行う。

タペタム反射が見えたら、集光レンズを猫の2~4cm前の位置に差し込む(図7)。間接検眼法は、広い眼底領域が迅速に視角化できるという利点がある。光源は眼から比較的離れた場所から照射するため、直接検眼法に比べて瞳孔収縮が大きな問題とならない。この検査法は猫に苦痛を与えず、且つ獣医師の顔も猫の顔から40~50cm離れているため、気難しい猫でも噛まれたり、引っ搔かれるリスクが少ない。著者のウェブサイトにはこの方法を実際に用いている映像があり、全身性高血圧症の猫に見られる病変の解説とあわせての手引きとして活用頂きたい。

病変が認められたら、直接検眼法やPanOpticTM検眼鏡検査法で、さらに高い倍率で検査を行う。直接検眼法では、拡大した眼底の正像が見えるが瞳孔収縮により視野が狭まる場合がある。

高齢猫の尿採取法

ご家族が持参するフリーキャッチの尿サンプルでも、尿比重(USG)と尿スティック検査の最初の手がかりとして十分である。膀胱穿刺とご家族によるフリーキャッチの尿採取法について著者のウェブサイトでも紹介している。猫の尿比重<1.035は、異常値と捉えられる。尿比重が1.035未満の場合は、詳しい病歴を聴取し、(流動食や「ミルク」等の「美味しい」液体の摂取、利尿薬の服用、非経口的液体治療等)尿濃度を下げる原因となりうる腎外性および生理的な原因を除外する。尿スティック検査でグルコースの評価(糖尿病)を実施することが推奨される。尿スティック検査や尿比重で異常値が認められた場合、理想的には膀胱穿刺で採取した尿を用いてさらなる検査を検討する。また腎臓病の猫であれば、尿沈査検査、培養、尿蛋白・クレアチニン比検査が必要となる。

高齢猫の血液採取法

予防医療や病気のモニタリングには血液検査が必要になることが多い。適切且つ適量のサンプルを採取するには、頸静脈採血が望ましい。橈側皮静脈を用いることもできるが、血流が緩慢なため採血中に血液の凝固を招き血液検査の妨げとなったり、採取できる血液量が少なくなる可能性がある。気難しい猫の場合、伏在静脈を好んで用いる獣医師も多く、十分血液サンプルが採取できる。骨関節炎が四肢や脊椎に存在する可能性も考慮して、保定はできるだけ優しく行う。

著者は、バリカンではなくハサミで毛を刈る方が好ましいと考えている。頸部にバリカンを用いると音が間近に聞こえ、振動が耳に伝わり猫が我慢できなくなることが多い。敏感な猫には局所麻酔クリーム(例えば、EMLA)も役立つが、効果が現れるまで20~40分かかる。ご家族が、自宅で塗布してくるのでもよい(当院のご家族の中には、猫の首のところは曲がったハサミ(湾曲クーパー)で刈る方法を好む人もいる)。

小型の血液チューブ(例:血液検査に0.5ml EDTA チューブを使用)も血液サンプルの有効性を最大限に高め、医原性貧血の発生を最小限に抑えるのに役立つ。

高齢猫の管理における問題点

iCatCareのWellcatの「ゴールドスタンダード」に沿って、すべての動物病院において高齢猫の定期健診を実施するには様々な問題がある。詳しい病歴の聴取と血圧測定を含む身体検査を実施するには時間を要する。臨床医の多くは時間に追われていることが多く、定期的に来院するような高齢で一見すると健康な猫は優先順位が低くなりがちである。しかし前述の通り、無症候性疾患が多く存在するためそれらを確実にを見つけるには、問診(病歴聴取)や身体検査で細部にまで注意を向ける必要がある。Wellcatのアプローチの正当性をスタッフに説得するのは難しいが、診療に携わるスタッフ全員が「納得」していないと失敗するリスクがある。

スタッフにWellcatケアの利点を説明する必要がある場合は、段階的に導入していくことを検討する

例:

- 最初は老年期猫(15歳以上)のみを対象として、健康診断を実施する。高齢期の猫の大半は1つあるいは複数の疾患を有するため、健康診断によって詳しい検査の必要性や治療に役立てることができる。このように一旦老年期猫の健康診断の重要性を認識することで、高齢期猫(11~14歳)、最終的には壮年期猫(7~10歳)にも順次導入できる
- はじめは時間のかかる血圧測定からではなく、尿検査から実施すると良い。ご家族がフリーキャッチの尿サンプルを持参すれば、検査には5分もかからないだろう。尿スクリーニングの利点をスタッフが理解することで、血圧測定にも時間を割く価値を見出しやすいだろう。

健康管理シートや動物看護師の時間を効率よく活用することが大切である。高齢猫の健診において、動物看護師ができるだけ多くの検査に携われる権限を持つべきだと著者は考えている。例えば、病歴聴取、身体検査(全身性高血圧症の有無を調べる検眼を含む)、血圧測定、ご家族が持参した尿サンプルを用いた検査はどれも動物看護師が実施可能だと考える。

一方で、様々な理由により予防医療を望まないご家族にどう対応するかという問題も当然存在している。よくあるその事例対処法を表4に示す。

最後に、猫の健診において我々は様々な課題を抱えているのも事実で、既に前述した通り、猫は明らかな臨床徴候を示さず、ライフスタイルを変えて病気を隠そうとする。同時に複数の問題が生じると、診断が難しくなり、管理も複雑になることが多々ある。骨関節炎の慢性的痛みを呈している猫を例にとると、ご家族は骨関節炎ではなく失禁は尿道周囲炎が原因ではないかと心配している場合がある。

高齢猫のご家族とかかりつけの動物病院が連携できる取り組み

高齢猫とより良い関係構築を図るのは必ずしも容易ではない。高齢で「リスクのある」猫を、Wellcatガイドラインに沿って定期的に健診をするよう努め、より詳しい病歴聴取と身体検査を実施するために十分な長さの診察時間を取る必要がある。

様々な手法（戦略）が考えられるが、必ずしもすべての病院やスタッフ、施設の構造に適しているとは限らない。最大の効果を得るためには、いずれかの手法（戦略）を選ぶにしてもスタッフ全員が納得し対応することが必要である。レセプション（受付）はご家族との最初の接点であり、予約に携わることが多いことから十分なトレーニングを受け臨機応変に柔軟に対応することが求められる。以下のような選択肢が考えられる。

1. iCatCareの「Wellcatの推奨事項」を動物病院に導入する
2. 動物看護師のトレーニングを行い、「高齢猫の相談」を行う権限を与える。相談は「動物看護師が単独」で行っても（健診であることをご家族には知らせる）、獣医師の診察予約と合わせて行うことも可能である（例：ワクチン追加接種）。高齢猫の来院頻度は比較的少ないため、可能な限りあらゆる機会を利用して身体検査を行う。

これらの検査を、無料または通常の健診やワクチン接種の一環として提供するかについては意見が分かれるだろう。11歳以上の猫の多くが、少なくともひとつ以上の健康問題を抱えているため、その治療や管理に対して支払うのは妥当だろう。また、定期健診を実施することで日常的な健康管理（例：ノミや寄生虫の処置）について話したり、食事のアドバイスをする良い機会になる。

表4. 多くのご家族の懸念事項とそれに対する助言

ご家族の懸念事項	可能な解決策
私の猫は「健康」であるのに、なぜ定期健診を受けさせなければならないのか	無症候性疾患の発症頻度と、わずかな臨床徴候の陰で、さまざまな病気が徐々に進行していることを説明する。人では、乳がんや前立腺がんのスクリーニング検査が広く実施されていることを例にとり、予防医療の価値を理解して頂く。
検査のストレスにさらしたくない	フリーキャッチの尿サンプル検査、病歴聴取、身体検査は、痛みやストレスを伴わない検査であり且つ有益な情報が得られる。大切な高齢猫をやさしく扱うことを、ご家族の方にきちんと理解してもらう。
検査費用は高額で、検査をしても猫の生活の質が改善されるわけでも、寿命が延びるわけでもない	医学は大きく進歩し、病気の治療は格段に進歩している。病気の「根治」が望めない場合でも、最新の治療により、生活の質が改善し、寿命も著しく延びている。
痩せていて、毛も少ないのは分かっているが、高齢だから普通だと思う	体重減少や毛量減少等の臨床兆候を示す医学的に問題のある高齢猫は珍しくないが、それは決して正常ではないことを説明する。これらの徴候は病気の存在を示唆し、現代医学によって治療できる可能性がある。
猫を連れて行くと、安楽死を勧められるのではないかと	ご家族の多くが高齢猫の具合が良くないと、かかりつけの獣医師が安楽死を勧めるのではないかと恐れている。我々獣医師の使命は、健康と生活の質の改善であることをご家族にきちんと説得する必要がある。

動物看護師が以下の項目を実施する場合には20～30分の予約時間で十分である。

- 行動や活動性の変化に関する情報をはじめとする詳しい病歴聴取
- 血圧測定
- 眼の検診で、全身性高血圧症に起因する損傷の有無
- 全身の身体検査
- 体重測定により体重の変化率(%)を計算し、ボディ・コンディション・スコアの記録
- ご家族が持参した尿サンプルを検査

必要があれば(例:追加接種の場合)、この予約の後で獣医師による10分間の予約時間を設け、獣医師が上記のデータをふまえて詳しい検査・治療計画を定め、ご家族に必要なに応じて助言を行うとともにワクチンを接種する。体重減少等の気になる項目の精査を目的として、12カ月以内に定期健診を行うようアドバイスするのも良いだろう。

3. 診察室が狭く、動物看護師による「高齢猫の相談」ができない場合、7歳以上の猫については、獣医師が時間を延長して追加検査を行うことが推奨される。30分あれば上に列記した項目をすべて実施可能である。

4. 高齢猫の来院を促すために、年1回の無料の「尿検査と血圧検査」の実施を推奨する。ほとんどの猫は(例:7～11歳)、異常な検査結果が出るのはまだ先で、正常な結果が得られるだろう。検査結果が正常であれば、ご家族と獣医師との関係構築のキッカケとなり、予防医療の価値と重要性を十分に教育することができる。ご家族もまたこうした健診で正常であれば安心でき、異常値をより正しく理解でき獣医師から勧められた場合には精密検査を希望しやすい。無料で提供される検査であっても、このような考え方を理解させることは重要である。

5. 電話をかけてきたご家族や来院したご家族に対して、受付で高齢猫の健診を勧めるよう指導する。また受付は尿採取キットについて案内し、次回予約前に尿サンプルの採取を指導することが可能となる。

6. 高齢猫専門の病院を運営する。前述の通り、動物看護師主導で高齢猫の病歴聴取と臨床検査に集中的に取り組むことができる。体重減少、全身性高血圧症、尿比重の低下等を認めた場合獣医師による精密検査に委ねる。

著者は、高齢ネコの健康問題の発見のためだけの健診に頼らない診療業務が望ましいと考える。その理由として、無料であっても必ずしもすべてのご家族が「同意」するわけではないことが挙げられる。従って、来院する高齢猫を評価する機会をできるだけとらえ、少なくとも体重を記録したり、別の日に改めて来院して詳しい検査を受けるようご家族に伝えるだけでも十分だろう。

7. ご家族向けの専門書を読む機会を提供する:ライフステージに合った健診を奨励するような情報(例えば、iCatCare作成のガイドライン)を提供する。

8. 裏付けとなる資料を病院に置き、病院ウェブサイトに掲載する(例えば、早期診断の利点や治療成功例のケースレポート)。

9. 1日もしくはイブニングイベントとして、ご家族を対象とした高齢猫に多く見られる健康問題に関するセミナーを開催する。ご家族の多くは、高齢猫の病気がどのように治療できるか理解できていないことが多い。

ご家族のための 一般的な健康管理のアドバイス

高齢猫は、一般的な健康管理について説明する絶好の機会であり、本稿では言及していないが関連事項は以下の通りである。

- 爪の管理:高齢猫は、爪を引っ込める力が弱くなり、また爪が生え変りにくくなるため、爪が伸び過ぎることがある。爪が厚くなり、カーペットや柔らかい家具に引っかかったり、伸び過ぎて肉球に食い込むことを防ぐために定期的に切る必要がある(図8)。
- グルーミング:高齢猫は骨関節炎の痛みでグルーミングや爪とぎが十分にできない場合があるため、ご家族がやさしくグルーミングを手伝うと良いだろう。痩せて骨ばった高齢猫の場合は、特に優しく実施するよう心掛ける。
- 病歴の項で述べた通り、行動や健康の変化をしっかりと監視する。行動や健康の変化があれば、どんなに些細に見えても、かかりつけの動物病院に連絡することをご家族に習慣づける。迅速な診断により適切な早期治療が可能となり、治療の反応性も良好となる。



図8. (1) 高齢猫の爪は、厚くなり伸び過ぎることがよくある。(2) 肉球に食い込むのを防ぐために、定期的に爪切りを行うこと。

高齢猫の食事のアドバイス

食事に関しては個々の状況に応じたアドバイスが必要である。壮年期以降の猫は体重増加、高齢猫は体重減少に陥りやすい。また高齢期と老年期の猫は、嗅覚や味覚の低下や、消化機能の低下もあり、体重が減少しやすくなる。できるだけ少量頻回に分けて食事の量を増やすことで、体重は増えるだろう。嗜好性が良い食事もある。体重と全身状態のモニターを行うことで高齢猫に最も適した食事を判断する重要な手がかりとなる。理想としては、体重と健康を維持できる食事を見つけることが望ましい。高齢猫に適した食事には、一般的な市販のキャットフード、ライフステージに合わせた食事、食事療法食や手作り食などがある。

高齢猫において、食欲減退はよくみられる症状の一つで、食事の摂取量を増やすためのヒントをご家族に助言することも大切である。

- 食事は、少量を頻回で給与。
- いつでも食べられるような環境を整える。活動性が低下している場合は、「食事ができる場所」を複数ヵ所設けると良い。
- 水を入れた食器や排泄トイレの近くに食事用の食器を置かない。
- 猫は浅くて大きい食器を好み、ステンレス、ガラス、陶器が用いられる。
- 食べ物は室温または体温より少し低い温度にして与える。
- 与えている食べ物の堅さを調べる。歯の問題がある場合、塊やドライビスケットよりも、柔らかいものを好む。

- 食器を少し高い場所に置く。骨関節炎により首に痛みがある場合でも、快適に食事ができる。食器は箱や少し高い位置に置いて様子を見る。
- 気温に左右されるが、ウェットフードの食べ残しは2～3時間以上放置しないこと。
- 話しかけ（グルーミング）は、猫と一緒に座って行う。手から食べさせて貰うことを好む猫が多い。
- 静かな場所で食事を与える。
- 手や顔に少量フードを塗り、食欲を刺激する。
- 様々な種類の食事を長時間そのままにしておくと、猫は圧倒されかえって不快感を増す。1時間たつて食べない場合は、片付け、少し時間をおいてから試してみるのが良い。
- 食欲をそそるおやつも食事への関心を高めるのに役立つ。調理したチキンや魚、エビ、チーズなどネコにとっては「特別なおやつ」である。
- 薬を服用している猫に対しては、服用時間と食事時間が重ならないようにする。食べ物と不快な体験を関連づけることで、食事が嫌になるネコもいる。薬が嫌いな猫には、毎日の世話にあまり関わっていない人が投与するのもひとつである。

それぞれの病態の管理

高齢の猫に多い疾患の管理および治療に関する詳細は別の稿で詳しく考察しており、様々な治療について解説している。

おわりに

高齢猫の管理の「ゴールドスタンダード」を定着させるにはまだまだ課題がある。アプローチの成功のカギは、細部まで関心を払う必要がある。正確な診断と最適な治療を実施するためには、ときには時間を要するが十分価値のあることであり、高齢猫の管理は、獣医師、猫、ご家族にとって非常にやりがいがある使命であると考えている。

参考文献

Gunn-Moore, D.A., Moffat, K., Christie, L.-A., Head, E. (2007) Cognitive dysfunction and the neurobiology of aging in cats. *JSAP*, 48: 546-553

Hardie EM, Roes SC, Martin FR (2002). Radiographic evidence of degenerative joint disease in geriatric cats: 100 cases (1994-1997). *Journal of the American Veterinary Medical Association* 220:628-632

Lulich JP, Osborne CA, O'Brien TD & Polzin DJ (1992). Feline renal failure: questions, answers, questions. *Compendium of Continuing Education for the Practising Veterinarian* 14: 127-151

Mayer-Roenne B, Goldstein RE, Erb HN (2007). Urinary tract infections in cats with hyperthyroidism, diabetes mellitus and chronic kidney disease, *J Feline Med Surg*, 9: 124

McCann TM, Simpson KE, Shaw DJ, Butt JA, Gunn-Moore DA (2007). Feline diabetes mellitus in the UK: the prevalence within an insured cat population and a questionnaire-based putative risk factor analysis. *J Feline Med Surg* 9: 289-99

Mitchell N. (2011). Ocular findings in cats with diabetes mellitus. Dissertation for DVOPhthal.

Paepe D, Verjans G, Duchateau L, Piron K, Ghys L, Daminet S (2013). Routine health screening findings in apparently healthy middle-aged and old cats. *J Feline Med Surg* 15:8-19

Pittari J, Rodan I, Beekman G, Gunn-Moore D, Polzin D, Taboada J, Tuzio H, Zoran D (2009). American Association of Feline Practitioners Senior Care Guidelines. *J Feline Med Surg* 11:763-778

Stephens MJ, O'Neill DG, Church DB, McGreevy PD, Thomson PC, Brodbelt DC (2014). Feline hyperthyroidism reported in primary-care veterinary practices in England: prevalence, associated factors and spatial distribution. *Vet Rec* 175: 458

Syme HM, Barber PJ, Markwell PJ & Elliott J (2002). Prevalence of systolic hypertension in cats with chronic renal failure at initial evaluation. *Journal of the American Veterinary Medical Association* 220: 1799-804

White JD, Stevenson M, Malik R, Snow D, Norris JM (2013). Urinary tract infections in cats with chronic kidney disease. *J Feline Med Surg* 15: 459-65

ウェブサイト

International Cat Care: www.icatcare.orgでは、猫に優しいヒント、ご家族に役立つアドバイスなどの情報を提供している。

著者のウェブサイト: www.vetprofessionals.comからは、様々な有用な情報を無料でダウンロード可能である。ダウンロードは http://www.vetprofessionals.com/catprofessional/free_downloads.html

高齢猫の健康管理シート

1. 猫とご家族の名前

2. 診察日

3. 年齢

4. 猫種

5. 性別と去勢（避妊）の有無（該当するものを○で囲む）

雌	不妊手術済み雌	雄	去勢済み雄
---	---------	---	-------

6. 既往歴：ご家族の懸念事項

7. シートに記入漏れがある場合は、ご家族と確認しながら記入

下記に該当する変化がありますか？	はい	いいえ	分からない	コメント
・・・口渇				
・・・食欲				
・・・食事の量				
・・・呼吸				
・・・体重				
・・・行動				
・・・活動性や敏捷性				
・・・活力				
・・・排尿／排便				
・・・グルーミング				
・・・被毛の状態				
・・・呼吸				
・・・ボディ・コンディション				
・・・眼／耳／鼻				
・・・爪				
・・・その他				

8. 活動性の評価項目 - 該当する欄に印を記入してください。

質問	はい	いいえ	分からない	コメント
----	----	-----	-------	------

以下にあげるような行動に関して、猫の活力ややる気に変化はありますか？

1. 階段の上り下り				
2. キャットフラップの使用				
3. ベッド／ソファ／膝／調理台に飛び乗る／飛び降りる				
4. お気に入りのベッドへの上り下り				
5. 遊び				
6. 木や塀等に登る				
7. 爪研ぎの使用				

以下にあげるような変化が見られますか？

1. 歩行がギクシャクしている（滑らかさに欠け、「猫らしい動き」に欠ける）				
2. 足を引きずる				
3. 歩き回ったり、関節に触れると有声音や無声音を発す				

以下にあげるような行動の変化が見られますか？

1. 家の中で人や他の動物と一緒にいるときに機嫌が悪くつまらなそうである				
2. 殻に閉じこもる 家の中で人や他の動物との接触が少なくなった				
3. 活動性低下				
4. いつもと違う場所で寝る 例：床				
5. 階段を上がれない 家の中に入らなくなった				
6. いつもと違う場所で排尿・排泄をする（例：排泄トレーの横、家の中の他の場所）				
7. あまり喉をゴロゴロ鳴らさない				
8. 食欲低下				
9. 被毛の状態（例えば、もつれ、ふけ）やグルーミング行動の変化：グルーミングが全体的に減少 ある部分をまったく構わず別の部分を過剰にグルーミングする（例：関節痛が原因）				

質問	はい	いいえ	分からない	コメント
以前に筋骨格系のケガはあるか (ご家族の知る範囲で)				
品種によって罹りやすい病気を知っていますか? (メイン・クイーン等の種類では股関節異形成が多い シャム、バーミーズ、トンキニーズ、オリエンタル、バリニーズも多いと思われる)				

9. 身体検査

評価	コメント
診察室での一般的な活動性	
全般的物腰と姿勢-正常/控えめ	
血圧測定 (読取り回数は平均3回) 用いたカフの大きさと測定部位を記録 (例:尾)	病歴を聴取している5~10分間を利用して環境に順応させてから測定等を行うことが望ましい。測定結果をここに記入
ハンドレンズと検眼鏡を用いた眼科検査	全身性高血圧症による眼の症状の有無を評価する。コメントはここに記入
体重 (kg)	
体重変化率 (%) (受診日と前回の体重差) を (前回の体重) で割って100をかける 例) 前回の体重が5kgで受診日の体重が4.7kgの場合 体重変化率は $= (0.3 \div 5) \times 100 = 6\%$ の体重減少となる	
ボディ・コンディション・スコア	5~9段階のBCSを用い記入
口腔検査 (例えば、歯科疾患、白い歯茎)。耳の検査 (耳垢、分泌物)	
眼、鼻の検査 (例分泌物)	
甲状腺部の結節の触診 (健常猫では甲状腺の腫大はない)	
胸部の聴診 (例: 心雑音、ギャロップ音、不整脈)	

評価	コメント
腹部の触診 (例:便秘、しこり)	
皮膚と毛並みの検査 (例:抜け毛、ツヤがない)	
身体にそってくまなく触診 (例:塊、突起)	
皮膚のつまみテスト (脱水症)	
その他の異常	

10. 尿検査の結果

検査	結果	コメント/解釈
比重 (屈折計)		
デ IPP スティック		

11. 血液検査の結果

検査	結果	コメント/解釈
血液検査		
血液化学検査		
T4検査		

12. 総合結果

13. 必要な対応

全項目異常なし。次回の検診日を予約

6ヵ月後 (7~14歳)

3ヵ月後 (15歳以上)

必要な追加検査項目

*本稿の翻訳監修の許可は著者ならびに出版社の承諾を得ています。
*法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載、コピーを禁止します。